



「なあ…、おいっ…て。ダメだ、寝ちまつてるよ」
「あはは、もう寝かせといてください。昨日、遅くまでゲームしてたみたいだから…」

「ゲームで夜更かし？…大学生みたいな生活スタイルだな…」

「宮さんはゲームしないんですか？」

「30超えてから、とんとしなくなったなあ…。でも、コジはまだ若いか」

「私もコジくんも27になりましたよ」

「そうか、てことは結婚式から…1年…？」
「と半年ですね」

01

俺は宮村竹蔵。

保険会社に勤める38歳、独身。

今日は後輩コジの家で、奥さんも交えて宅飲みしている。



キッチンダイニングとひと続きになった居間のソファ。

写真立てには、ウエディング姿の2人が写っている。お邪魔するのは、これが初めてではなく、割と何回も来ている。

新婚&新築祝いに会社のみんなと来たのが初回だった。

それ以来コジと飲むと、家でもう一回飲むと誘われた。

遅い時間帯にお邪魔することもあったが、奥さんはいつも怒らず受け入れてくれた。

最初の頃は、着替えて、ちゃんと化粧もしてくれてたらしい（すみません）。

すっかり打ち解けてくると、部屋着のまままで、すっぴんのことも多くなった。

しかも奥さん自身イケる口で、一緒に飲んでくれるので、女日照りの俺としては非常にたのしい。ついつい足の向く回数が増えるというものだ。

何年前か前、コジが入社してきた。

俺も少し仕事を教えた。



それ以来、宮さん、宮さん、と慕ってくれて、今では一緒に飲む回数が一番多い。

そんなコジが高校からの彼女と結婚すると言ってきた。

それが一年半前。

結婚式に招待され、奥さんを初めて見た。

ウエディングドレス姿の奥さん：みさちゃんを見て、なんてキレイなんだ、と思った。

矢で胸を射抜かれたようにドキドキした。

しかし、それは秘密だ。

コジは素直で人懐っこい明るさの持ち主だし、外見も某男性アイドル芸能事務所風で爽やかな感じ。

みさちゃんともお似合いだ。

片や俺は、一言で言うならゴリラである。

筋トレで鍛えた体には自信があるが、脂肪もタツプり乗ったままなので、かえってゴリ感を増してしまっていることは否めない。

昭和の時代なら、二枚目俳優の中にも、太い眉に厳しい面構えのタイプがいたろうが…。



平成すら終わりを迎える今の時代、キレイな男や、塩顔というのかメガネの似合う感じの男がもてるのだろう。

俺は時代に恵まれなかったのだ。

「そんなことないですよ、私かっこいいと思いますよ、宮さん」

そう言って、みさちゃんが励ましてくれる。

が、コジを旦那に選んでいては説得力が無い。

「お世辞はよくないぞう！でもうれしい！みさちゃんに言われると」

そう、それでもやっぱりうれしいものだ。

「カンパニー」

たわいもないきっかけで、何度も乾杯する。すでに2人とも酔っているのだ。

コジはソファの端っこで、毛布を掛けられて眠っている。

うっすら、いびきが聞こえてくる。

大きな声で話していても、まるで起きてこなかった。



「お世辞じゃないですってばあ。がっちりして、男らしいじゃないですか」

「うーん、それが今の時代に合わないんだよ……」

「あー、出た時代理論。そういうトコだと思えますよお？」

「え？」

「やっぱり、何かのせい……、宮さんの場合、時代のせいにしてるのがよくないと思いまっす！」

「えー。でもさ、俺なりに分析して……」

「かーッ。男の人はすぐそうやって傾向と対策を練る！」

「ど、どういうこと？」

「傾向なんかいくら調べたって、個人差の足元にも及ばないんですよ！調べるだけムダです！」

「えー！」

脳天をかち割られる思いがした。

「だって99人が流行りの男が好きでも、目の前の一人が宮さんを好きなら、それでオツケーじゃないですか」

う、それは……。



「…まあ、そうだ」

「だったら、データ上の99人なんか無視して、目の前の一人を探しに行ったほうがよっぽど有意義です。そうでしょ？」

「それも、まあ…。」

「…そうだね」

「でも宮さんは、確率百分の一って書かれた紙を眺めながら、うずくまってるわけです。そんなんで彼女が出来ますか？」

「…」

「空から女の子が降ってでもこない限り、できないでしょう!？」

「うーん、たしかに…。」

「…できない」

「みさちゃんが高揚した感じで、フランス、と鼻息をもらし…。」

「宮さんの事をいいと思う女の子は、この世の中の中に必ずいるわけです」

「俺の目を覗き込んで。」

「じゃあ、あとは…?」



「…さ、探しにいくだけ？」

「そおです！確率百分の一なら、百人に会うだけのことですよ！自信持ってください！」

「…おお…！」思わずグラスを持ち出す。

「「カンパニー」」

たのしい、本当に楽しいひと時だった。

02

「う」

腕時計を見る。

しまった、一時間ほどだが、寝てしまったようだ。

帰らないと…。

その前に、おしっこがしたいし、のどがカラカラだった。

水を飲んで、トイレを借りに行く。

コジは同じ場所で、同じように眠っていた。

みさちゃんは見当たらなかった。

ジャゴオオオ…。



トイレから出た俺は、辞去を告げるために、みさちやんを探した。

小さい明かりが漏れている部屋があった。ドアは開いている。

寝室のようだが、ベッド横のミニテーブルで、ほのかな明かりを頼りに、みさちちゃんがグラスを傾けていた。

「宮さん……」

こちらに気付いて振り向いた、

みさちちゃんの頬に、

涙が伝っていた。

「……どうしたの」

「えへへ……。たまにありませんか？お酒飲んでたら

……勝手に出ちゃうやつ」

残念ながら、俺にはその経験はなかった。

「俺、帰るから……、あとでちゃんと玄関閉めといてね」

みさちちゃんを残して、寝室を出る……。

「宮さん。私に……としての……?」

「え?」



振り返ると、みさちゃんが椅子を斜めに傾けて、脚をベッドに放り出していた。

しなやかなのにふんわりと脂肪を纏った、白い脚。

「私に女としての、魅力：感じますか？」

「え？」

しつかり聞こえているのに、思わず聞き返してしまっただ。

そりゃ感じる：けれども質問の意図がわからない。

なにより、いつもと雰囲気が違う。

さっき見た涙もちらついた。

「：どうしたの」

これしか言えなかった。

「もう半年エッチしてないんです」

「え、なんで：？」

新婚なのに？

俺にはわからない事だった。

やっと彼女の謎めいた雰囲気の正体がちよつと分かった気がした。

話を聞いてほしいんだな、と判断した俺は、ミニテーブルの反対側に座った。



「子作りのためのセックスって、男の人には重荷な
んですね…」

みさちゃんは、灯りを反射するグラスを見つめて、
独り言のように言った。

当然、一度も結婚したことのない俺にはわからない
質問だった。

「分からないけど…、俺の感覚だと新婚ってエッチ
しまくるもんだと思ってたけど」

「わたしもです」
やっと、こっちを見て、少し笑った。

「最初は…、それでもしてたと思います。ただ…私
達付き合い長いから、一般の新婚さんよりは冷静だ
ったかも」

高校からの付き合いだと聞いている。
でも、高校から付き合い合って結婚したやつを1人知っ
ているが、今度8人目が生まれると言っていた。

個人差の足元にも及ばない…、か。

「それで…私、子供欲しかったから、コジくんは何
度もせがんだんです」

「うん」



生唾を飲んでしまった。

「最初は生ナカ出しだー、種付けセックスだー、ってバカなこと言っってはしゃいでたんですけど」

この2人のセックスを想像したことがないではないが、こうも生々しいと…反応しそうで、困る。

「だんだん、コジくんが息切れしてくるのが…今なら分かるんですけどね。当時は、あれっどうしたのかわかって…」

「なにか変化があったの?」

「ちよっとした目線の外し方とか、体の角度とかで…乗り気じゃないのが伝わってきて…」

「…」

「でも、私バカだから、そういう違和感を感じるのに結局なんなのがよく分からなくて…。コジくん、その一瞬以外はやる気に見えたし、孕ますぞーとかバカも言ってたし」

「うん」

「で、そこから私も周期とか調べて、頑張りだすんですけど…」

そこから、なかなか言葉が出てこなかった。



俺は何も言わず、待った。

「私が…、が、頑張れば、頑張るほど…、すれ違っ
て…、は、離れて行っちゃって…」

少しの間、みさちゃんはすすり泣いた。

俺はヘッドボードにおいてあるティッシュを取っ
てきて、差し出した。

みさちゃんは、何度か目を押さえ、鼻をかんで、ま
た話し始めた。

「結局、私がコジくんを追い詰めたんです。男の人
の繊細さを分かってなかったんです。…勃ちが悪く
なるって言うんですか？最後はもう、ふにゃふにゃ
で入らない日があって…」

「…」

「それからエッチしてないんです。子作りだけじゃ
なく、夫婦の営みという意味でのセックスも無くな
っちゃいました…おしまいっ」

打って変わって、からりとした笑顔で、そう言った。
話は聞き終わったが、俺にはなんのアドバイスも出
来そうにない。



「そうか…、セックスなら俺も3年以上してねーぜ！」

「かっこいいポーズで、言ってみた。賭けではあった。」

「えー。3年も？その間どうしてるんですかあ」
乗ってきてくれた。

しばらく、俺のさみしい性事情で盛り上がった。
雰囲気がいっつも明るいのに戻った。

「そっかー、宮さんも潤いがないんですね、乾いたもの同士、カラカラズ結成ですね」

ふふっとみさちゃんが笑う。
笑うとかわいい。

ふ、っとその笑顔が止まる。
「言っちゃおうかな…」

みさちゃんの目が、俺の目を見る。
「な、なに…」

「コジくんが宮さんを家に連れて来るのって、私と2人きりの夜を過ごすのを避けてるからだと思うんです」



スタンドの小さな明かりは、みさちゃん顔を横から照らす。

これまで、理由など考えたこともなく、誘われるままに通っていた。

でも、今の話を聞けば、なるほど合点がいく。

普通、新婚家庭にそんなに頻繁に先輩つれて帰らないよな…、と今になって気付く。

「そ、そっか。まあ、その…、そっか」

コジにそういう裏の目的があったとしても、俺は楽しかったわけだし…。

「でも」

「え？」

「それだけじゃないと思うんです…」

みさちゃんがここで目をそらした。

「な、なに…」

みさちゃんはすぐには言ってくれない。

モジモジと照れたように視線をさまよわせてから、やっと口を開いた。

「み、宮さんと私が…、その…、間違いを起こすのを期待してると思うんです」



「間違い？」

え？

それって…。

俺とみさちゃんがセックスするってこと？

「そうです、いえ、間違いなくそうだと思います」

「な、なんでわかるのさ…」

焦る。

いきなりこんなこと言われたら焦るわ！

急に心臓が動きまくって、痛い。

「だって、最近やたら見え透いた用事で宮さんと私を2人きりにしようとするし…、寝方が変なときあるし…、ウソ寝ですよあれは！」

え〜！

「え〜！」

なんだってエ…、え、ちよつとまってよくわからん…。

「今日、寝てたのも寝たフリだっていうの？」

「今日のは、本当に寝ています。その為に夜更かしとかして、寝やすいコンディションを整えています、あれは」



「なんでそんなにわかるの……！」

「そういう、しようもない策略みたいなのは、すぐ分かります！それに、絶対当たってます！」

ああ、女の人が思い込んだらテコでも動かない……。俺が折れるしかない。

「なんのために……？奥さんの浮気を期待する旦那なんて……」

「それは……、正直わかるような……、わからないような……」急に言いよどんだ、みさちゃん。

……が。

「宮さんの方が分かるんじゃないですか！？同じ男性だし」

俺に振ってきた。

「えー。そんな、そりゃエロの世界だと寝取られとかあるけど……、現実でやるか？」

「やるんじゃないですか？人が妄想することは実現する、みたいな読んだ事ありますよ」

「ああ、俺もあるな……」

でしよ、つとayingってみさちゃんが笑う。

やっぱりかわいい。



「え、ええー。いやいや、だからって、ちよつとま
つて…、え？それで…？」

「宮さん、私とエッチしてくれませんか…？」
ゴーン、っと頭の上で、寺の鐘がどつかれた気がし
た。

03

「な、ななな、なんでそうなるの！？」

「やっぱり、男の人って繊細。すぐには抱いてくれ
ないんですね」

冷静で、どこか余裕すら感じられる様子のみさちや
ん。

あなた、さつき泣いてましたよね？

「え、ちよつとまって、…わかった！仮に、仮にだ
よ？ユジに寝取られ趣味があるとしても！でも、み
さちゃんは何で俺とエッチしようと思うの？
どういう気持ち、それ…？」



「それは：私、このままだと、コジくんと別れることになると思います。私が耐えられませんか」

「う、うん、まあ、それは：うん」

お酒飲んで一人で泣いてるぐらいだし、それは仕方ないのかもしれない。

「でも、宮さんとエッチしたら、コジくんと関係が修復できるかもしれない：！」

ゴーン。

またしても頭の中に寺の鐘が鳴り響く。

それって成立する理屈なのか？という思いが大半を占めたが、頭の隅に少し、あ、別に俺の事は好きじゃないのね、とがっかりする気持ちもあった。

「これって、宮さんにはとっても失礼なお願いだって、わかってます。でも：」

みさちゃんが、ちらりとこちらを見て、

「宮さんって、結構、私のこと好きですよね：？」
はにかみながら、そう言った。

三度のゴーン。

見透かされていましたか：。

「あ、ま、まあ：：そうね：」



えへえへと引きつった笑いを浮かべるしかない俺。
みさちゃんがそっと立ち上がり、

側に、

寄って、

来る。

俺はその間、何も出来なかった。

俺の真横に立ったみさちゃん…。

そのまま、俺の太ももの上に腰掛けてきた…！

ゆったりとした動作で、俺の胸にしなだれかかって

くる…。

「私…、女として、どうですか…？」

顔が近い！

俺のももに乗るお尻の感触も、一回り小さな体のサ

イズ感も、たまらなく女を感じさせる。

おまけに、ふわっといいにおいがした…、なんで酒

臭くないのお…！？

しかし、しかしだ。

「だ、ダメだよ。ユジの…後輩の奥さんなんだから」

言ってから、半ば自分に言い聞かせてるな…、と思
った。



「その、ユジくんが期待してるんですよ…」

「憶測でしょ」

「でも当たってます」

そこで、みさちちゃんが、自分の部屋着に指を引っ掛けて、引いた。

えり首が大きく広がって、胸元が丸見えになった。

「ノーブラです。私のおっぱい、どうですか…?」
ここから目を逸らす精神力は、俺にはなかった。

薄暗い中で、白く浮かび上がるように目に飛び込ん
でくる、美しい、絵に描いたような端正なおっぱい
が、そこにはあった。

「左の方がすこしおっきいんですよね」

「え、そう?」

左右を見比べる。

違いはよくわからなかった。

「触ると分かりやすいんです、ほら」

空いている方の手を服の下から入れ、自分でおっぱ
いを触りだすみさちちゃん。

おっぱいのまるみをなぞって、ちくびをやさしくつまんだ。



「確かめて…」

「いや、それは…」

みさちゃんが俺の手を取り、服の中に導く。

瞬時の葛藤の末、俺はぎゅっと拳に閉じて、親指だけで触った。

右のおっぱいを、拇印でも押すかのように親指でさわってゆく。

乳首がぷるっ、こりっ、とした触り心地で、たまらない。

左のおっぱいも同じようにして、親指に感触を刻んだ。

「ほんの…ちよつと左の方が大きい…かな」

ちらりと見たみさちゃんの顔が、勝ち誇ったような、満足そうな笑みを浮かべていた。

しまった、と思った。

みさちゃんの服の中から手を引き抜く。

頭も引き上げた、いつの間にか随分のぞきこんでいたようだ。

その上げた頭に、みさちゃんの手が絡みつく。



「かつこいいですよ、宮さん。私、ときどきしてま
す」

みさちゃんの指が、俺の頬や耳をなぞってゆく。
さらに、くいつとその手に力が入り、俺の顔がみさ
ちゃんの方へと引き寄せられた。

斜め下のみさちゃんの顔と、正面から向き合う。

「今言っても信じてもらえないかもしれないけど、
私、宮さんに抱かされたって思ったことあるんです
よ。なにも関係なく」

体がカアツと熱くなった。

胸の奥から喜びが湧き出てくる。

「ホントに：？いや、でも俺、コジと全然タイプが
違うじゃないか」

「夫と正反対の人に性的な興奮を覚える：、そんな
に変なことですか？」

「いや、それは：」

正直、普通によくわかる。

男と女にどれだけ差があるかはわからないが、男な
らいろんなタイプの女とエッチしたいなんて普通
に思うことだ。



実際にイイナと思う女も、惹かれる女も、複数人いて不思議はない。

特に俺は、人のことは言えない。

コジの奥さんであるみさちゃんに、結婚式で見かけたときから惹かれていたのだから。

「抱いて欲しい…、宮さん」

ただ、でも、やっぱり。

「今日はダメだよ。今日このまましたら、俺、コジにも、みさちゃんにも、二度と会えなくなると思う」

「…」

「コジとちゃんと話してくれ…。当たってるって言ってたけど、どれだけ当たってようが、やっぱり今はまだ推測なんだから」

「…はい」

「…俺も、俺もみさちゃんにめっちゃくちやドキドキしてるよ。正直、抱きたい」

「ふふっ、それは…わかってました。ココ、すっごく大きくなってましたよ…さっきから」

みさちゃんが、俺の勃起したチンコを、ズボンの上からさする。



「う」

「わ、カタあい！」

急にきやあきやあとはしゃいで、チンコの形を確かめるようにさすってくる。

「私でこんなにカタくしてくれましたよすよね？……うれしい……」

夢中で俺のチンコをさすり続ける。

まあ、無理もないのかもしれない。

さっきの話では、ふにゃちんに嫌な思い出があるようだから……。

「ねえ、見たい！出していいですか？」

「だめっ」

「えー。舐めたい」

頬をぷう、っと膨らませて、とんでもないことを言ってくる。

「とにかく、ね！ちゃんと話してから！わかった？」

みさちゃんがにんまりした顔で見つめてくる……。

「『から』……、『から』かあ。『から』だったらいいんですね？」



「うう」

ちくしょう、恥ずかしいぜ……!

とてつもなく名残惜しいが、みさちゃんを太ももの上から下ろす。

カリオスト○の城のルパ○になった気分だ。

クラリ○をそっと引き離して、俺も立ち上がった。

「じゃ俺、帰るから……」

チンポジを直しつつ、寝室を出る。

みさちゃんがついて来る。見送ってくれるらしい。

居間では、ソファの上でユジが眠っている。

あまり見ないようにして、手早く荷物を取る。

玄関で靴を履き、扉に手を掛ける。

「宮さん」

ちゅ。

振り返ると、頬にかかるくキスされた。

「私、他の人とするなら、宮さんがいいです……!」

俺は何も言えず、そのままロボットののように、扉を

開け、外へ出て、閉めた。

「……」

か、かわいすぎるやろおおお。



狼の遠吠えのような心の叫びが、空を超えて月まで届くようだった。

04

週が明けて月曜日。

会社の昼休み。

コジに誘われて、飯を食った。

といっても、カラオケルームである。

「ここなら、気兼ねなく話せますからね」とはコジの弁。

何を頼んだか、どんな味がしたか、覚えていない。

2人ともほとんど話さず、もくもくと食った。

しかし、食べ終わって、ようやくコジが話し始めた。

「みさおに聞きました」

「お、おう、そうか。い、言っとくけど、何もしなかつたぞ……」

ちよっとだけウソだったが、おっぱい触りました、とは自白しづらい。



「はい、迫ったけどちゃんと話せと言われた、と言
ってました」

「う、うん。そうだ……。で？ちゃんと話し合ったの
か？」

「はい、みさおがいろいろ……。昔この時こう思って
ただろう、って僕の気持ちを言い当ててきました」
「そう」

「概ねその通りでした。だんだん、みさおとするの
が重くなっていったんです。最初は自分でも認めた
くなくて……。ずいぶん悪あがきしましたが、結果み
さおを傷つけてしまいました」

「エッチするのが重いって、どういうことだろう？
自分の奥さんだからこそ、気兼ねなく出来るんじや
ないのか。」

「よくわからない……。とりあえず相槌を打つ。」

「うん」

「宮さんとみさおを意図的に2人きりにしたのも
本当です」

「……そうか」

そして、ユジの告白が始まった。



最初は…、単に想像しただけです。

2人が僕の目を盗んで、セックスしてたらどうしようって…。

普通に、ちよっと思っただけでした。

嫌だ、と思っただし、嫉妬もしたし…。

でも、なにかムズ痒くて…。

ある時、僕、電話で席を外して…、その時も思った

んです。もし2人がこの間に何かしてたら…。

でも、実際そんなことナイナイって、電話を終えて

戻ろうとしたんですけど…。

その時、ふと、ある考えが降りてきたんです。

本当に2人がセックスしたら、僕、どうなるんだろ

う？って。

そこで初めて、リアリティを感じました。

それまでの想像はあくまでバカな想像で…でもそ

の時はなんか違ったんです。

そうしたら、動悸はするし、変な汗はかくし…でも、

その…。

…勃起してたんです。



たまらなくなっていて、トイレで出しました。
あんな興奮は今までありませんでした。

その日を境に、妄想が頭から離れなくなりました。
そんなことばかり考えていると、体が勝手に行動
を起こすんですね…。

半分、こんな事やめよう、やめよう、って思ってる
のに…。

わざと用事作って席を離れたり、トイレで無駄な時
間を過ごしたり、寝たフリした事もありました。

自分で自分がわからない、って今までは思ってたん
ですが…。

今回、みさおにズバズバ言い当てられて…。
嗚呼、やっぱり僕って、そうなんだって…。

他の部屋の歌声が染み入ってくるカラオケルーム。
俺は何も言えぬまま…。

ふうっと息を吐いたコジが、昔の秘密を暴露した。

実は、大学時代、みさおが悪い奴に酔い潰されて、
ホテルに連れ込まれたことがあるんです。



：はい、ええ、わかりません。

自分から話しては来なかつたし、聞いてもいません。僕が知っていることも知らないでしょう。

でも、セックスはされたと思います。

みさおに落ち度はありません。

そいつは似たような事ばかりしてる最低なグループの一人でした。

僕が知ったのは、飲み会の様子を、何人か經由して友人から聞かされたからです。

そいつが酔い潰れたみさおを、自分が送ると言っ譲らず、抱き抱えて行ったそうです。

だから、証拠があるわけじゃないんですが…。

そのグループはひどい噂ばかりで：レイプや輪姦なんて言葉が僕の耳にも入っていました。

僕はそいつの所へ行きました。

でも、僕が何を言ってもそいつはトボケました。

僕はそいつの顔面を殴りました。

すぐにやり返されました。

いえ…、ボコボコとかは、ならなかつた。

僕が弱すぎて、ケンカにもならなかつたんです。



2〜3小突かれて、倒れた僕に、そいつはお金を握らせてきました。

1万いくらかだったと思います…財布の札を無造作に掴んで寄越したんです。

それがまた、腹が立ちました。

でも…、…、…。

…う、…、…。

すみません。

…僕はそれを…、受け取ってしまった。

結局後で、気持ち悪くなって、賽銭箱に捨てるように入れて逃げてきましたけどね。

その後、なるべくみさおの側にいましたが、ちよっかい掛けてくることはありませんでした。

でも、…いえ、違います。

誰か1人に執着するような奴では無かったただけなんです。

彼氏が騒ぎ立ててくる面倒な女にさっさと見切りをつけて、次に移っただけだと思います。

…ええ、ええ。

僕もそう考えようと思いました。



結果に恵まれたただけだとしても、いいじゃないか、僕が行動を起こしたから、少しは守れたんだって…。でも、あのとき…、お金を突き返せなかった。ちよつと小突かれただけで、正義も勇気も何もかも、吹き飛んでしまったんです。それだけが、残念です。なんで僕ってこうなんだろう、って未だに思うんです。

コジが顔を上げる。

「宮さん、みさおを抱いてくれませんか？」

「おいおい…」
なぜそうなる。

「そしたら、僕達やり直せる気がするんです」

「そ、そういうもんか？」

こここのところの理屈もよくわからない。

他人に抱かれたりしたら、ちよつとイヤになるもんなんじゃないのか？

「度を越えて失礼なお願いだと、自分でも呆れます…」



まあ…。

細かい事情を抜きにして言えば、夫婦の潤いのために肉バイブになってくれ、と頼まれてるようなもんだ。わしゃ、アダルトグッズかー！とブチ切れても、おかしくはない場面ではある。

「でも、頼めるのは宮さんしかいないんです！」
「うーん」

まるで、よくわからん。

まず、あの過去を悔いていながら、なぜに寝取られて興奮する？

普通は逆じゃないか？

また同じような事があったら、今度は跳ね返せる様に強い男になろうとするのが、普通の方角性だと思ふのだが…。

また、なぜに寝取られれば、夫婦仲が修復することになるんだ？

コジのチンコが勃ったからって、夫婦の問題が解決した事になるんだろうか？

しかし、そういう俺も脛に傷持つ身だ。



つまり、後輩の奥さんに岡惚れしている、という弱みがある。

おそらく、みさちゃんだけでなく、ユジにも見透かされているのだろう。

だから、白羽の矢が立ったのだ。

「…それが、みさちゃんと話し合った結果なのか？ 2人では解決できないの？」

「結果的に…そうなります。どのみち、このままじやダメだろうって。みさおも耐えられないって言うてるし、僕も心が重くって、どうにも動けないんです」

「一週間ぐらい、溜めまくってから、エッチしたらだめなのか？」

「そんな簡単に思いつくようなことは全部試しました…！それで、頑張って…、というか頑張れば頑張るほどダメで…お互い傷ついていったんです。今からまたそんなことを試そうとは、とても思えません」

「すまん」

ヤブ蛇だった。



「いえ、僕の方こそ……すみません」
弱った。

消極的に断る理由がなくなりつつある。

正直、みさちゃんは抱きたい。

それが、2人の助けになるという。

でもなあ。

ホントにいいのかなあ。

……いいのか別に。

ストーンと胸に落ちた。

俺は何に言い訳しているのだろう、と思ったのだ。

ふたりは、自分たちでは解決できなかつた問題を、

第三者の力を頼って、解決しようとしている。

しかも、どうせこのままダメになるくらいなら……と、

寝取られという劇薬にまで手を出そうとしている

わけだ。

そのリスクを理解していないはずはない。

やぶれかぶれではあるが……、それだけの覚悟を決め

て、俺に打ち明けた、ということになる。



「わかった。前向きに考える」

「宮さん」

「ただし、条件がある。コジがやっぱり嫌になったら、いつでも止められるようにしよう」

その可能性が、あると思った。

あの過去を、払拭しようとしているのではないか？
：俺から、みさちゃんを救い出すことで、コジが自らを試そうとしているのかもしれない。

まあ、可能性にすぎないが、もしそうだったら、上手にやられてやればいい…。

そしてそれは、俺の、自分への言い訳になる。

そこから、2人で話し合って詳細を詰めた。

まず、俺とみさちゃん温泉旅行に行く。

日常から離れた方がいいと思うし、コジに自分と向き合う時間を与えるためだ。

コジの行動は自由。



一緒についてきてもいいし、別部屋をとってでもいいし、家で待っていてもいい。

そして、いつでも止めることが出来る。

金は俺が出すことにした。

押し問答に発展したが、俺が譲らなかつた。

そのほうが気が楽だからだ。

「こんな感じでどうだ？」

「いいですね」

今のユジに動揺は見られない。

さっぱりとしたもんだ。

「じゃあ、みさちゃんがこれで良ければ決行だな…。

あ、やっぱ：ちよつとまってくれ」

「はい」

ユジの事を考慮して計画を練ったわけだが、これじゃ俺がすこし困ることに気がついた。

「その、万が一だけど、ユトの最中に止めに入られるのは、俺もさすがに嫌だわ」

それに、勇者の試練としても、ユルすぎる気がする。

「どうします？」



「タイムリミットを設けよう。22時を超えて止めに入らなかつたら、始める。そこから先はもう、コジがいくら後悔してもやめないし、連絡も絶つぞ、いいな」
強めに宣言してやった。
このくらい脅してやれば、コジのケツにも火が付くだろう。

「は、はい……！」
コジが恍惚の表情を浮かべ、ぶるりと震えた。
……ように見えただけ……。
オラ、よく分からなくなってきたぞ……。

05

ウィンドウを下げ、玄関先に立つコジに問う。

「今からでも、俺と交代していいんだぞ。2人で旅行すりゃあ、案外いい感じになるんじゃないか？」

「いえ、宮さんお願いします」

「……出発するけど、本当にいいんだな」



「はい、家にいます」

行動の選択はコジに任せただけだが、意外だった。一緒にくるものだと思っていた。

最後の最後、助けに来る筋書きだとも思うのだが……家から追いかけたほうがヒロイックということだろうか。

それとも、家でゆっくり妄想に浸りたいのか……。もはや、俺には分からない。

「じゃあ、そういうわけだけども……」

「はい、いきましよう」

助手席に座るみさちゃんのはっきりと言う。

肝が据わっているなあ、と感心した。

ギアをドライブに入れて車を出す。

いつもは酒を飲むので、駅まで歩いているのだが、今日は車で来ていた。

温泉宿までは、高速で休憩をはさんで2時間といったところ。

住宅街をのろのろと進む。

一時停止で頻繁に止まる。



「宮さん、いいひと過ぎますよ、ここで交代なんて、非常識なお願いしているのは私達の方なのに」

「いや〜、でも俺にだって下心があったって、引き受けたわけだし〜」

「下心って、私にですか?」

すこし弾んだ声が返ってきた。

隣を向く。

みさちゃんとも目が合う。

「わたし、どんなことされちゃうんですか?」
にまにまと笑ってそんな事を言う。

くそう、ドキドキするやんけ!!!

気持ちを落ち着けて、再度、車を出す。

「この間も思ったけど、みさちゃんってけっこう小悪魔だよな」

「だって、宮さんってなんか、いじめたくなるんだもん」

これがみさちゃんの女の顔かあ。

いつもの夫の先輩というフィルターが一枚外れて、少しみさちゃんに近づいた気がした。

「ユジと2人のときは、どんな感じなの?」



コジの話題は少しまずいかなと思ったものの、どうしても聞いてみたかった。

「ん〜。気が合う〜、ウマが合う〜、近いんですよ、なんか。ひっかかる所が少ない感じ。ホラ、あーるじゃないですか合わない人だと、あれえソコそうしちゃう〜？みたいなこと。そういうのが無いんですよね〜」

「へ〜」

「今でも、そうですよ。エッチ以外では。だから、子供が出来て、お互い性欲の解消方法を見つけたら、後はたとえばセックスレスでも全然うまくいく予感があるんです」

「え、セックスレスでもいいの？」

「たとえばですよ、たとえば。問題が解決した未来の話です。結果的に落とし所がそうなら、受け入れられるってことです」

「ほう」

「今は嫌ですよ。コジくんとすれ違って、離れたままなんです。そんなんじゃない絶対イヤ〜」

「うん」



「ユジくんは今、自信を失ってるんです。私が励まさないきゃいけないんですけど…空回っちゃって。それで、私まで自信を失っちゃいました」
えへへ、と乾いた笑い声が聞こえた。

「宮さんが頼りなんです」

高速のサービスエリアで休憩がてら昼食をとる。車内ではすこし真面目な話だったが、打って変わった、ここではバカなやり取りを繰り返した。

このサービスエリアは小高い場所にあり、展望台から山間の田舎町の景色が見えた。

「あ〜いい風」

みさちゃんが手すりに体を預ける。

ふんわりとした髪が風にたなびいた。

俺が初めて見る服で、全体に淡い色が女の子らしくていいと思った。

スカートからはキレイな脚がすらりと伸びている。

「もー、景色見ないでどこ見てるんですか？視線感じますよ」

おっと、しまった。

「今日、かわいいね。いつもと違う感じ」



慌てて言い繕ってみる、が、内容は本音だった。

「おっ？そうですか？でも、ちよつと言うの遅いですよ」

「俺、大器晩成型なんだ」

「へー、じゃあ、今からもっとホメてもらえるわけですね！」

みさちゃんが体を寄せて、腕を絡めてきた。

おっぱいが腕に押し付けられて、控えめに言って最高だった。

ああ、ウソでも、なんか幸せだな。

「結婚式で初めてみさちゃんを見たとき、キレイすぎてびっくりしたんだ」

「へっ？」

「こんなキレイなコがいるんだ、と思った。それから話せるようになって…、キレイなだけじゃなく、かわいいし、明るくて楽しいし、よく気が付くし、料理もうまいし、気取って無いし…」

「ちよ、ちよちよ…、宮さん？」

「遅くに家に押しかけてるのに愛想良くしてくれるし、スラッしててスタイルいいし、脚もキレイだ



し、でも痩せギスなんかじゃなくて、このあいだ見たおっぱいもふっくらしてて、超キレイで……」

「ぎゃあ!?!」

「こんなコが俺の嫁さんだったらなあ、って何度も思ったよ。もう、かわいくて、かわいくて……」

「す、すみません……。も、もう……。かんべんしてつかあさい……」

みさちゃんが顔を真っ赤にして、根をあげた。

珍しくうつむいて、もじもじしている。

やっとこの小悪魔に一矢報いることが出来たように、満足だ。

「宮さん! 私のぱんつ見ます!?!」

「往生際が悪いぞ。今回は俺の勝ちい……」

「むうう……!」

飲み物を買って、トイレに寄って、車に戻った。

車内に乗り込み、エンジンを掛けて、シートベルトを締めた。

さて、また高速、安全運転で行かなければ……!

「そうだ、宮さん」

呼ばれて、助手席を見る。



みさちちゃんがスカートをめくり上げて、ぱんつを見せながら待機していた。

「ぶふおッ!?!」

「やったあー。私のかちいいい〜!」

みさちちゃんが両手を挙げてよろこぶ。

ストッキングを纏ってもなお白く光る輝き。

俺は目頭を押さええて、かぶりを振った。

「うふっふ〜。してやられましたねえ。そんなに悔

しかったですか?」

上機嫌で覗き込んでくるみさちちゃん。

悔しいのではない、ちっとも悔しくなんか無かった。

可愛い過ぎて、やばい。

楽しい過ぎて、つらい。

この時間が、一瞬の陽炎に揺らぐ砂上の楼閣である

ことがいたたまれなかった。

要するに、なんでホントの彼女じゃねえんだよおお、

ってこと。

こんなのにめり込んで、俺は大丈夫なのだろうか。

つつん。

みさちちゃんが俺のわき腹をつつく。



「やりすぎちゃいました？怒ってます？」

「いや、全然。みさちゃんみたいなた人を彼女にしたら、毎日騒がしいんだろうな」

「そおですよ。大変なんですから…。」

「明日まで」

「え？」

みさちゃんが、ふいに上体を近づけてくる。

まだシートベルトをしていない彼女が、俺の耳元まで近づいて、囁いた。

「明日まで…私を…宮さんのカノジョにしてください」

またふいに離れて、照れ笑いを浮かべるみさちゃん。

「恥ずかしいこと言っちゃいました。私じゃダメで
すかね？」

もお…！！

もおおお…！！

もおおおおお…！！

我が愛車は軽快に温泉宿へとひた走った。

大丈夫などではない。



所詮、アリ地獄にひとたび足を踏み入れたならば、逃れる術など：ありはしないのだ。

06

「わあ、すごい。2部屋もある！え！ベランダに露天風呂が付いてる！いいんですかこんな豪華な部屋で」

「いいよ。いいよ。俺が泊まりたかったから」
きよろきよろしながら、小走りで部屋のあちこちを見て回るみさちゃん。

かわいい。さっきのことがあったからか、余計かわいく思える。

「ほほほ、素敵な奥様ですね」

「はは」

仲居さんに奥さんと勘違いされているが、まあ、その方が都合がいいだろう。

チェックアウトするときには旦那が入れ替わっている可能性があるのが、普通ではないが…。



この部屋にしたのには2つ理由があった。

2部屋ないと、ユジが現れたときに、俺の居場所が無くなるからだ。

居心地は最悪だろうが、部屋の外で一晩明かすなど、さすがにゴメンこうむる。

そして、露天風呂付きの部屋にしたのは、ひよっとしたらみさちゃんと一緒に入れるんじゃないか、というオトメ心を捨て切れなかったからだ。

それを考えたときには、まさかな、と半笑いだったが、しておいてよかった。

今はもう、気持ちが高ぶって、入れるモンなら入りたい、という方向に傾いていた。

説明を終えて仲居さんが出て行く。

夕食は18時に、この部屋にセッティングされる。のんびり寄り道してきたから、今は16時。

（観光牧場に立ち寄った。可愛いカノジョとのデート気分を満喫してしまった。）

夕食までに、ひとつ風呂浴びてくれば、いい感じなのだが…、はてさて。

「え、せっかかくきたんだから、旅館のお風呂、全部



入りましようよう」

これがどういう旅行か、まるで頭に無いかのような楽しみぶりだ。

この旅館には男性用大浴場が2つ、女性用大浴場が2つある。

部屋の露天と合わせて、全部となると3回入ることになる。

「どれから入る？」

「決めてください」

そうくるかあ。

正直な気持ちに従うならば、一緒に部屋の露天に入りたい。

だが、そうなればもう、22時まで我慢できないだろう。

一緒に風呂に入っておいて、今から22時まで我慢なんて、考えただけでぞっとする。

あるいは…、

もう…、

しちゃってもいいかな？

いいともー！



：いやいやいや、何を考えているんだ俺は。

自制心が崩壊しかけているじゃないか…！

「この、大浴場Aにしようよ！メインのお風呂みた
いだし、最初はここがいいよ…！」

「はい」

大混乱の心の内を差し置いて、にこやかに装って話
す俺。

：はからずも、ジキル博士とハイド氏みたいな二面
性を自分に感じてしまった。

ひよっとしたら、コジも、自分の中のなにかと戦っ
たりしているんだろうか…。

浴衣に着替える。

もちろん別々の部屋だが、間をさえぎるものは、ふ
すまだけである。

ちよっと横にずらせば、みさちゃんを着替えを拝見
できてしまう。

しゆるしゆる、と衣擦れの音が、俺を誘惑する。
慎重な力加減で、試しにふすまをずらしてみる。

悪魔のいたずらか、無音で丁度いいくらいの隙間を
作るふすま。



片目をつむり、ツルの恩返し爺さん気分で縦スリットから覗き込む。

みさちゃんが向こうから、覗き込んでいた。

「なにしてるんですか」

「うあああああ！！」

スパッと勢いよく、ふすまが開く。

腰を抜かして、倒れこむ俺。

すでに浴衣に着替え終えたみさちゃんが立っていた。

「もう、そんなに見たいなら、言ってくれれば見せてあげるのに」

みさちゃんが浴衣のすそをピラピラめくると、膝から下の足が揺らめきながら露わになる。

あ、けっこうエロい…。

気を取り直して、2人で大浴場Aに向かった。

「じゃ、先に出たら、さっきの場所で待ってるから」

「はい」

男湯と、女湯に別れて入る。

その、別れ際。

「い…じ…し…」



俺の耳に、小さな声が届く。

振り返ったが、みさちゃんはずでに女湯ののれんを
潜り抜けた後だった。

でっかい風呂に、足を伸ばして浸かる。

いつもなら、愉悦のため息をつくところだが…。
いくじなし。

そう言ったと思う。

ええ〜…!!

どおいうことお〜…!!!

え?マジで、どういうコト?

風呂選びで日和ったことを見透かされているの?

でもなんで?

コジとの問題解消のために俺とするんじゃない
の?

望んでるの?求めちゃってるのおお…?

それとも、どうせだから…からかって楽しんでる
の?

おっさんをときめかせて、何が楽しいのオオオオ〜
…!!!

フラフラと、風呂から上がってきた。



のぼせた訳ではない。

頭が混乱して、大変だったのだ。

最終的に俺の脳内では、荒唐無稽な妄想が繰り広げられた。

マッチョな妖精たちが、「幻聴ウー！幻聴ウー！」と叫びながらマイムマイムを踊るのだ。

そこへ、キザなオオカミがオープンカーでやって来て、妖精たちをひとり残らず轢き飛ばしたあと、「女が股濡らして待ってんだぜ？、突っ込んでやんなア！」と言って走り去って行くのだった。

ひとり取り残された俺は、そうしてフラフラと風呂を出るのだった。

そして、待ち合わせ場所に行く。

みさちゃんは、まだのようだ。

俺はロビーを通り抜け、館内の売店に向かった。

飲み物コーナーを物色し、購入。

パキリ、と心地よい音を響かせて、蓋をまわし開ける。

茶色いビンの飲み口から、冷たい液体を一気にノドに流し込む。



「ぷはぁ」

果汁とも、ソーダとも違う、一種独特な風味がする。その名も、ビンビン元気君。

「って、栄養ドリンクじゃねーか……!!」

周りの数人が振り返る。
……しまった。

ドリンクのビン捨て、そそくさと待ち合わせ場所に向かう。

何をやっているんだ俺は……

ソファに座って、ぼんやりその辺を眺める。

やばい……

ドキドキする……

なんか、なんか緊張してきた……!

ドリンクのカフェインのせいだと思いたいが、違うだろう。

頭では、ユジが来るかも、まだわからない、なんて考えてはいるが、体が、もう、期待しちゃっているのだ。

「はぁあああ。どうしようう」
ひどく落ち着かない気分だ。



浮かれているのかと言えば、案外そうでもない。もちろんネガティブになっているわけでもない。緊張、どきどき、そわそわ…。

「おまたせ〜、結構待ちました？」

「いや全然」

みさちゃんが現れると、ガラッと気分が入れ替わった。

ウソのように落ち着いた。

18時から、20時近くまで、2人で夕食をとった。部屋に豪華な料理が並べられ、楽しい時間を過ごした。

お酒は飲まなかった。

この後のことを考えると、飲めなかった。

みさちゃんも、いらなと言った。

お膳が片付けられると同時に、布団が敷かれた。

隣に並べられた2つの布団と枕を眺めると、妙な気分になってきた。

時刻は20時を回ったところ…22時までは、まだもう少しある。

「ふう、もうお腹いっぱい。この後どうします？」



みさちゃんが、尋ねてくる。
俺はこう答えた。

「部屋の露天に浸かろうぜ。…一緒に」
みさちゃんと目が合う。

長い、とても長い時間が流れた…、ような気がした。
「いいですよ」

みさちゃんの微笑みが…、ひどく挑戦的に映った。

07

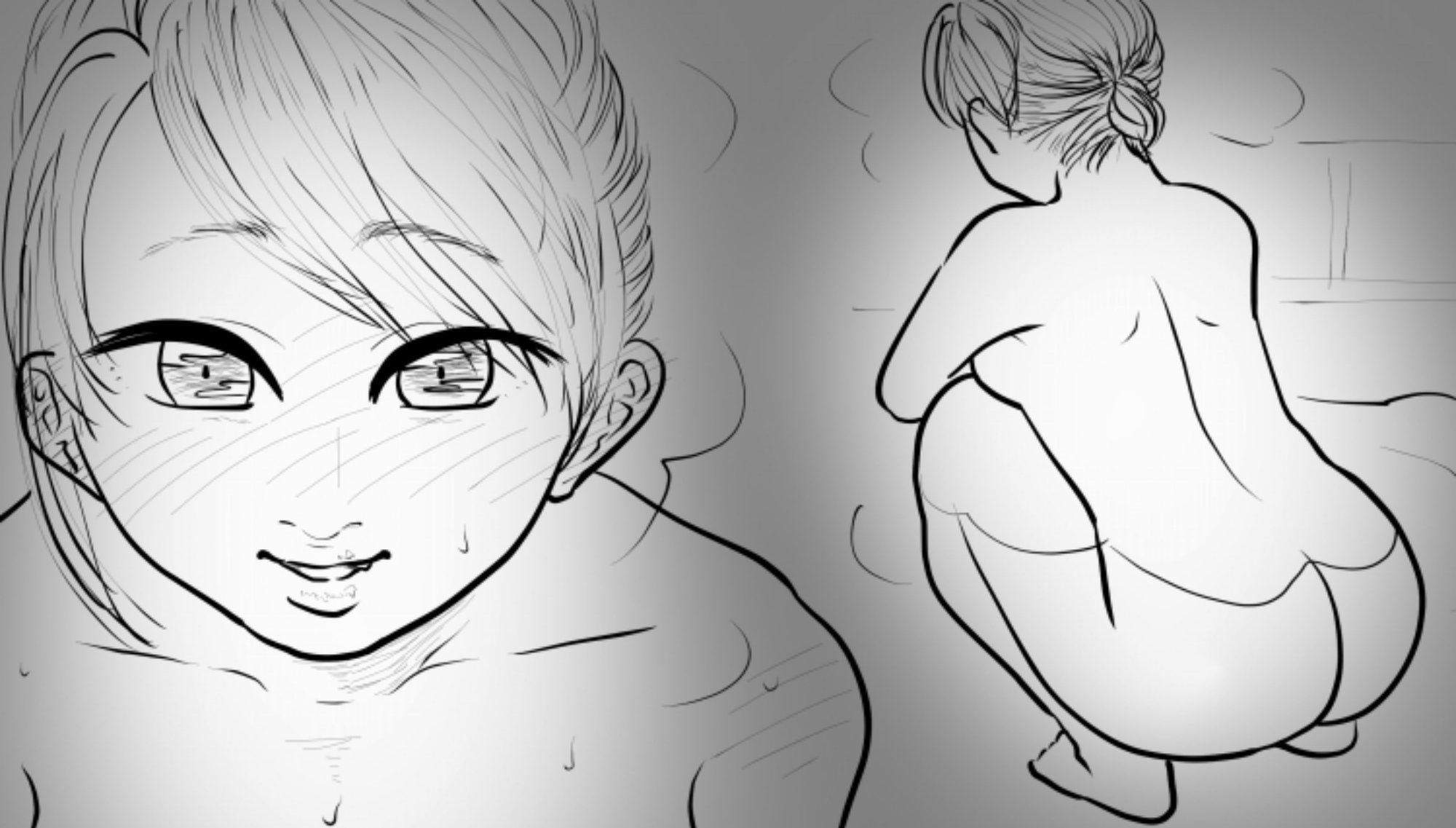
割と温度を高めにしてある露天風呂に、ざぶりと浸かる。

部屋のベランダにあたるスペース、それが一部、風呂になっていた。

すでに日が落ちて暗いが、眺めは山と川ばかりで、人工物は少ない。

露天自体も暗いが、安全のためか足元を照らす灯りだけは、はっきりと明るい。

一方、部屋の方を見れば、吐き出し窓の向こうに室



内風呂を挟んで…さらに向こうに、人影が揺らぐ。みさちゃんも浴衣を脱いでいる。

まずは室内風呂の奥の扉が開き、みさちゃんが現れる。

夕方、風呂に入ったので、体を洗う必要は無い。

そのまま室内風呂を通り過ぎ、吐き出し窓が開かれる。

バスタオル一枚を巻いただけのみさちゃんが、露天に舞い降りた。

覗かれる心配はまずないと思うが、みさちゃんはやがんでから、バスタオルを取る。

裸になったみさちゃんが、取っ手にバスタオルを掛けた。

ああ、でも肝心な所が、いまいち見えないな…。

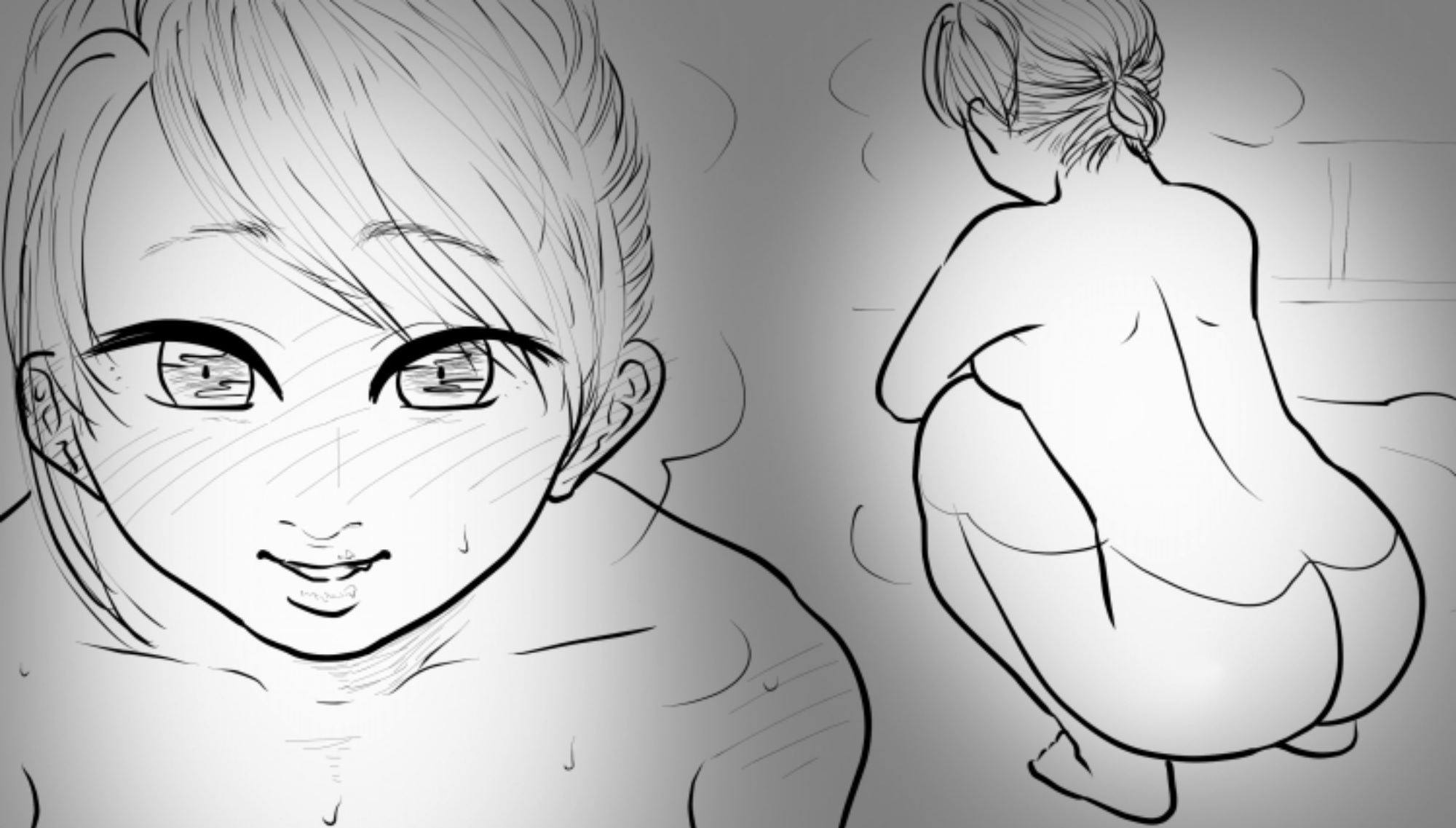
「見すぎ、です」

注意を受けてしまった。

桶で湯をすくって、掛けてやる。

さっと湯船をまたぎ、お湯の中に滑り込むみさちゃん。

一瞬だが、すばらしい肢体が目の前を通った。



「ああ、きもちいい。10階なんて、こんな高い場所のお風呂はじめて」

みさちゃんに興味は、すぐに景色に移り、身を乗り出してあちこち眺めた。

白い肩や背中が、水面から隆起している。

折りたたまれた腕の向こうに、おっぱいの輪郭がチラチラ覗く。

お湯の中で、今にも浮かび上がってきそうなお尻が、ゆらゆらと揺れた。

みさちゃんが、こちらを向く。

「ごめんなさい。宮さん。こんなことに巻き込んで真面目な顔だった。」

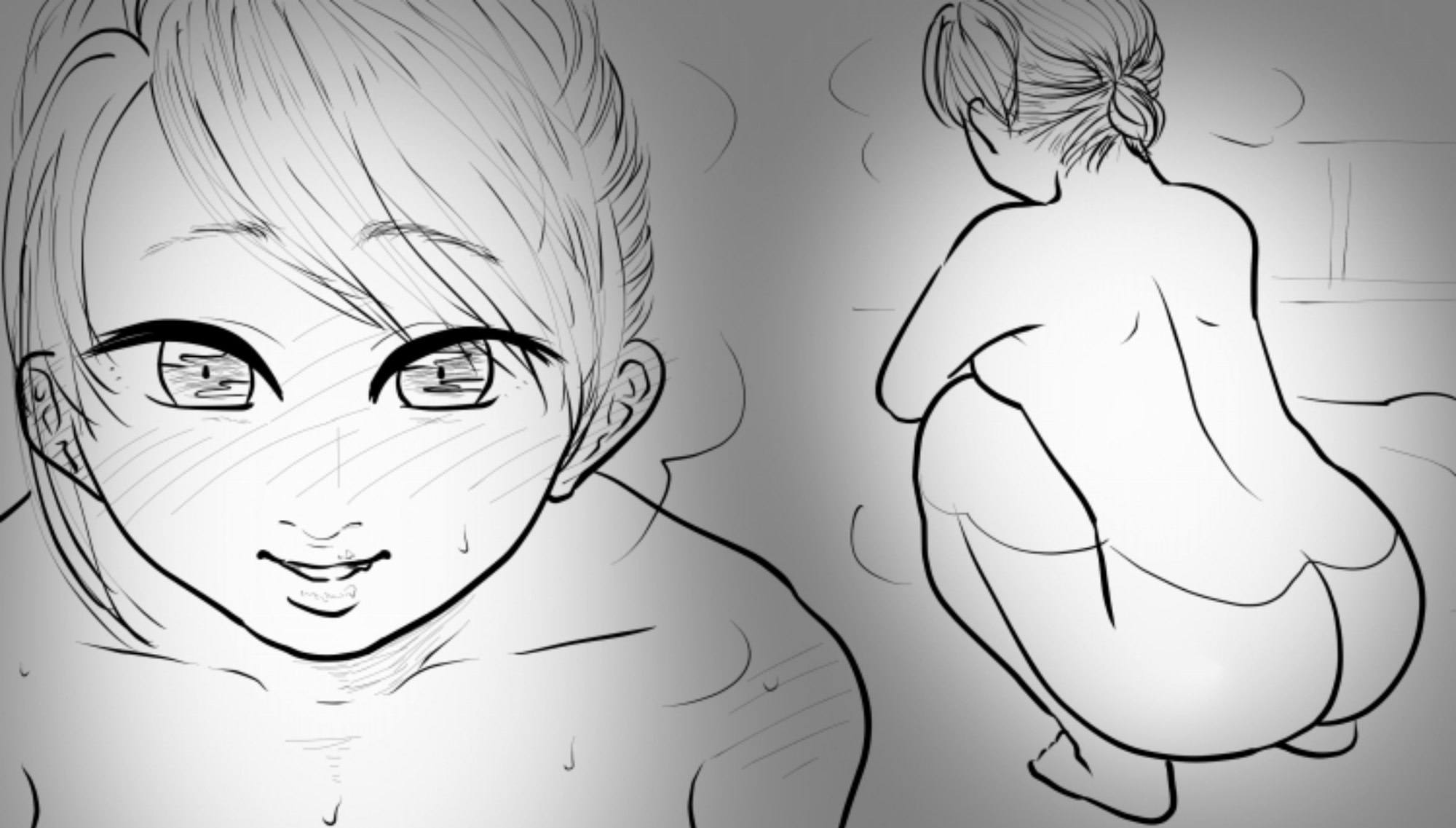
「ああ、うん。でも俺はいい思いするだけだから…まだ分からないけど」

コジが止めに入る可能性は、まだある。

でも、その方がいいのかもしれない…、傷が浅く済むのだから。

今からでも引き返せる、…そう考えて、いや、もうムリだな…と思った。

「なんで、そんな、いいひとなんですか？」



みさちゃんが言う。

「いいひと？」

自分ではそう思わない、どこがだろうか？

「だって、こんなに振り回されてるのに、まだ、私達に合わそうとしてくれてるじゃないですか…！」

みさちゃんが、少し怒って言う。

「私なんかと、エッチしたぐらいで…割に合わない気がします…」

そうか、みさちゃんには夫婦の問題に巻き込んだ罪悪感があるのか、と気付いた。

さっと誘惑して、さっとエッチするだけなら、軽く済んだのかもしれない。

俺が、コジに選択権と時間的猶予を与えたことで、かえって、みさちゃんの中に申し訳ない気持ちが生まれたのだろう。

「私なんかって言わないでくれ。俺が傷つく」

「うー」

ちゃぽ…。

「もう！宮さんって…、もお…」

ちゃぽ…。



みさちゃんが、
近づいてくる…。

「私でいいなら…」

鼻と鼻がくつつきそうだ。

「…いい思い…いっぱいいしてくださる」

湯船の中で、

抱きしめあって、

そして…。

キスをした。

ゆっくりと、口を離す。

ほのかな明かりに照らされるみさちゃんは、夢幻の

ようにキレイだった。

抱きしめる体はどこまでも柔らかく、俺が抱くまま、

ぴったりと押し付けられた。

もう一度、キスをする。

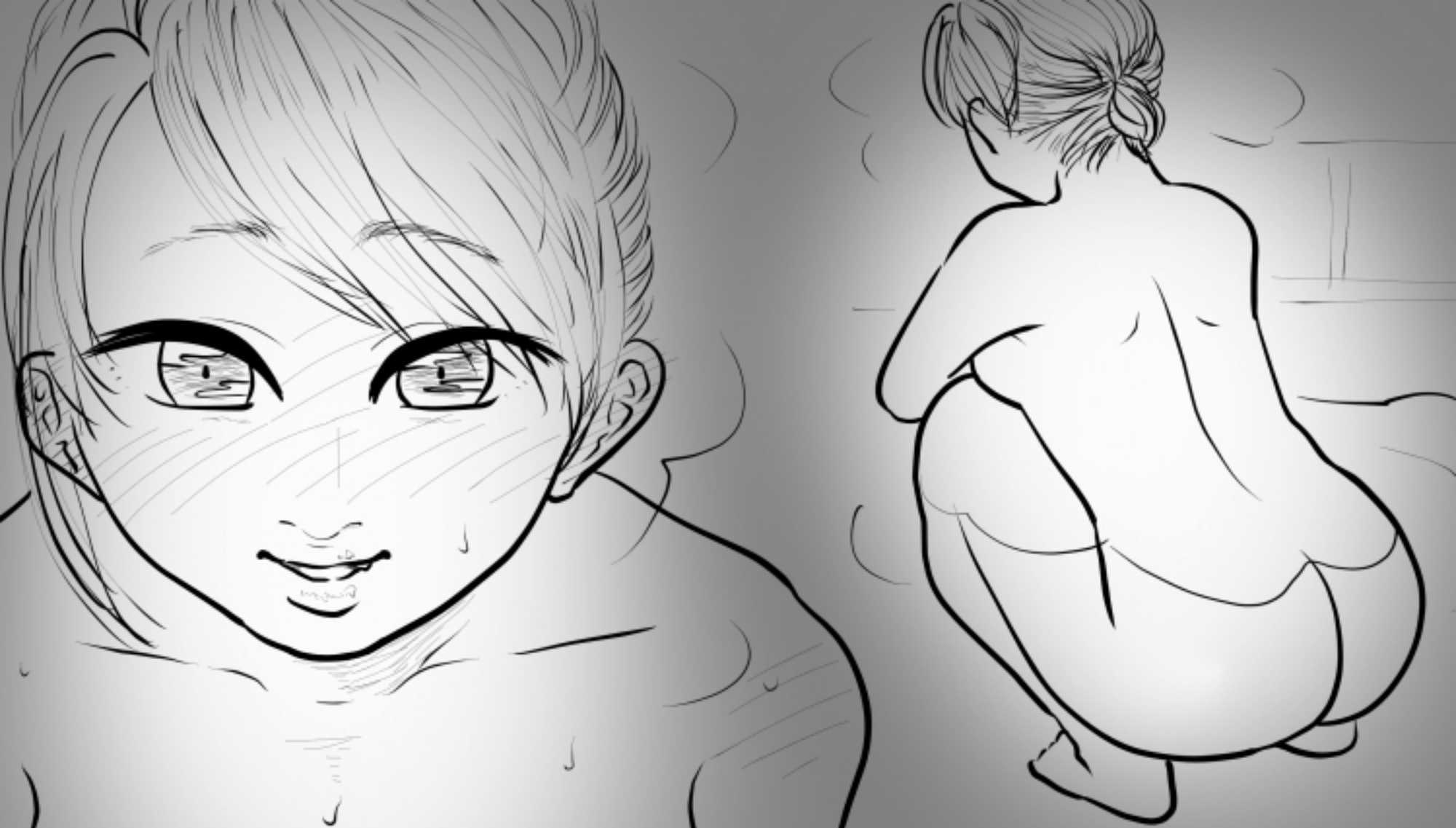
今度は大人同士の、コミュニケーションのキス。

俺の舌がノックすれば、みさちゃんの唇が、その中

に招き入れてくれる。

みさちゃんのアツい舌に出迎えられて、熱のこもっ

たおもてなしを受けた。



「ふう…、んう。んあ、あ、あ、くちゅ…」
ねっとりとした舌が、いやらしく絡みついてきて、
みさちゃんへの愛しさが募った。
だから。
切ない思いを、抱きしめる強さにかえて、口いっば
いにみさちゃんを感じる。
夢中で舌を絡め合った。

みさちゃん以外の存在が消えてゆく。
ここには、俺とみさちゃんだけ。

互いの息遣いと、たまに排水口に湯が吸われる音が
した。

口を離すと、みさちゃんは、顔を傾けたまま…トロ
ンと何処かへ彷徨ったままだった。

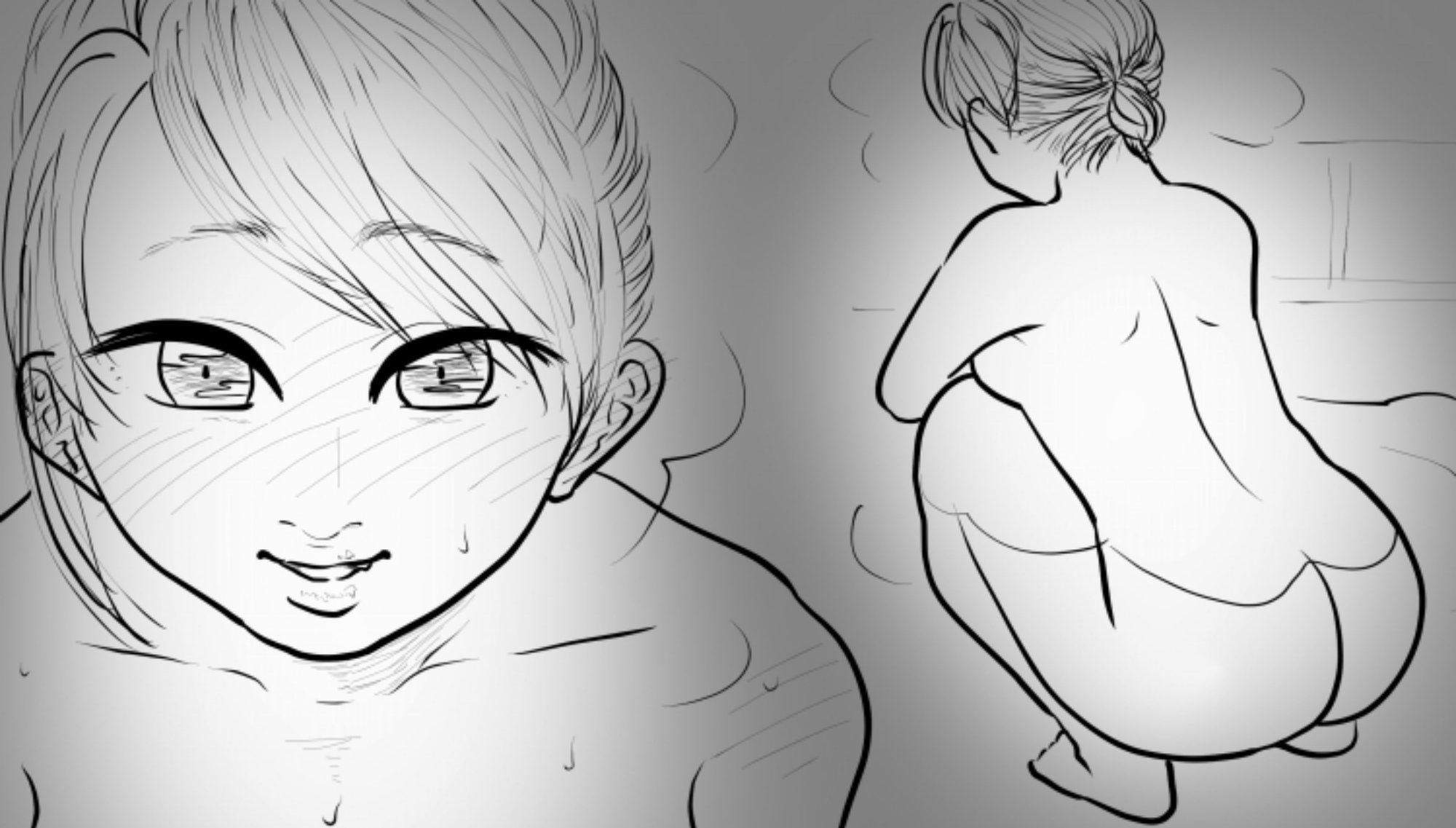
かわいい。
いとしい。

なぜ、俺のモノでないのか！

今、コジが止めに来たら…俺は、戦ってしまっても
しれない…。

少なくとも、上手にはやられてやれそうもない。

「宮さん…。カタいのずっと当たってるよ？ね、…



見たいな」

いつの間にか戻ってきたみさちゃんも、もぞもぞと動きたがる。

俺は、抱きしめる腕を解き、見えるように湯船から出して、そのまま仁王立ちした。

「ごくっ、…すっごおい」

自分でも少しそう思った。

20代、あるいは10代に戻ったような角度でそそり勃つ剛直。

怒髪天を衝く、と言うが、何かに怒れるようにして、天に向かってピクピクとわなないている。

「わ〜…」

指先で、ちよんちよんと触れる、みさちゃん。

「私でカタくなってくれるの…うれしいな」

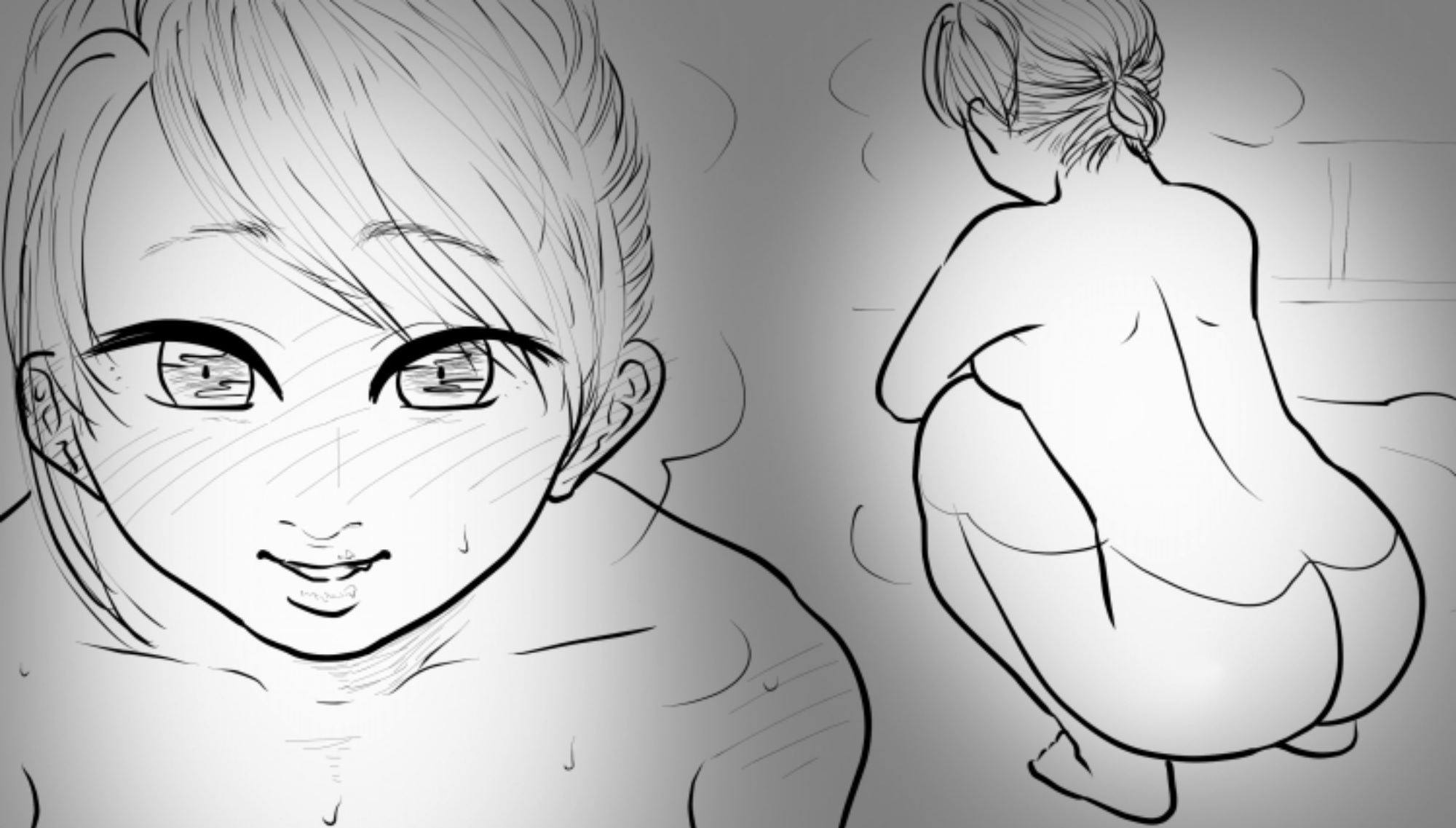
やさしく、絶妙な力加減でさすってゆく。

「昔はなんとも思ってたなくて…カタいのが当たり前だと思ってました」

亀頭の弾力を確かめるように…。

玉袋の重さを感じるように…。

「今は、たまらない気持ちになります。体からあふ



れてくるぐらい…うれしい」

両手を添えたまま、ちゅ、っと俺のペニスにくちづけてゆく。

「…いとしいです…ちゅ、宮さんの…ちゅ」

「ああ…みさちゃん…ん」

ちゅ、ちゅ、ちゅ、っと亀頭の先端から、吊り下がった玉袋まで、みさちゃんがキスの雨を降らせてゆく。

「ああ、まずいよ…。こんなことされたら、感じちやうよ」

みさちゃんの目が俺を捉える。

「うれしい、いっぱい感じてほしいな…」

気持ちよくするね…」

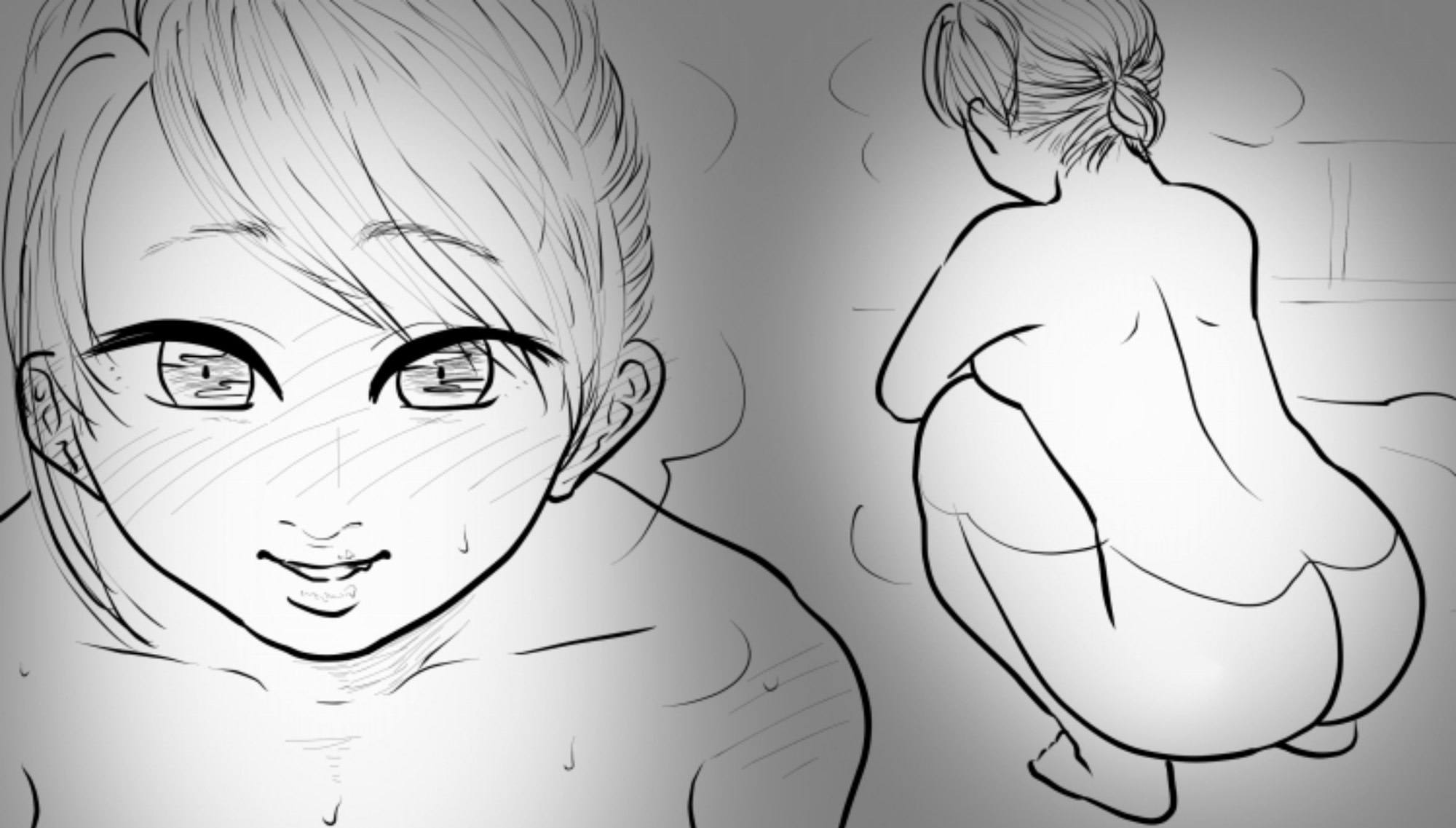
ちゅくちゅくと、いやらしく手でしごいていたみさちゃんの可愛らしい舌が、唇の間から、なまめかしく伸びてきた。

ぬるり、と熱い感触が走る。

「ふあ…、は、ちゅ…む…」

「ああ」

ため息を漏らさずにいられない。



「んっ…んっ。ろうれふか…あむっ、きもち…れろ…いいれふか…?」

「ああ、ああ…気持ちいいよ…くっ、ああ…」

「らあ…、みやひゃん…、れろ…、ふあふあい…みやひゃん…、いっふあい…れるる」

心を込めて、丹念に…うっ…、男の性器をねぶってゆく、みさちゃんに…くっ…、俺は心の底から湧いてくる悦びに打ち震えていた。

しかし、こんな所で出すわけにはいかない。

「ありがとう。…う、もういいよ…」

そう言っつて、腰を引く。

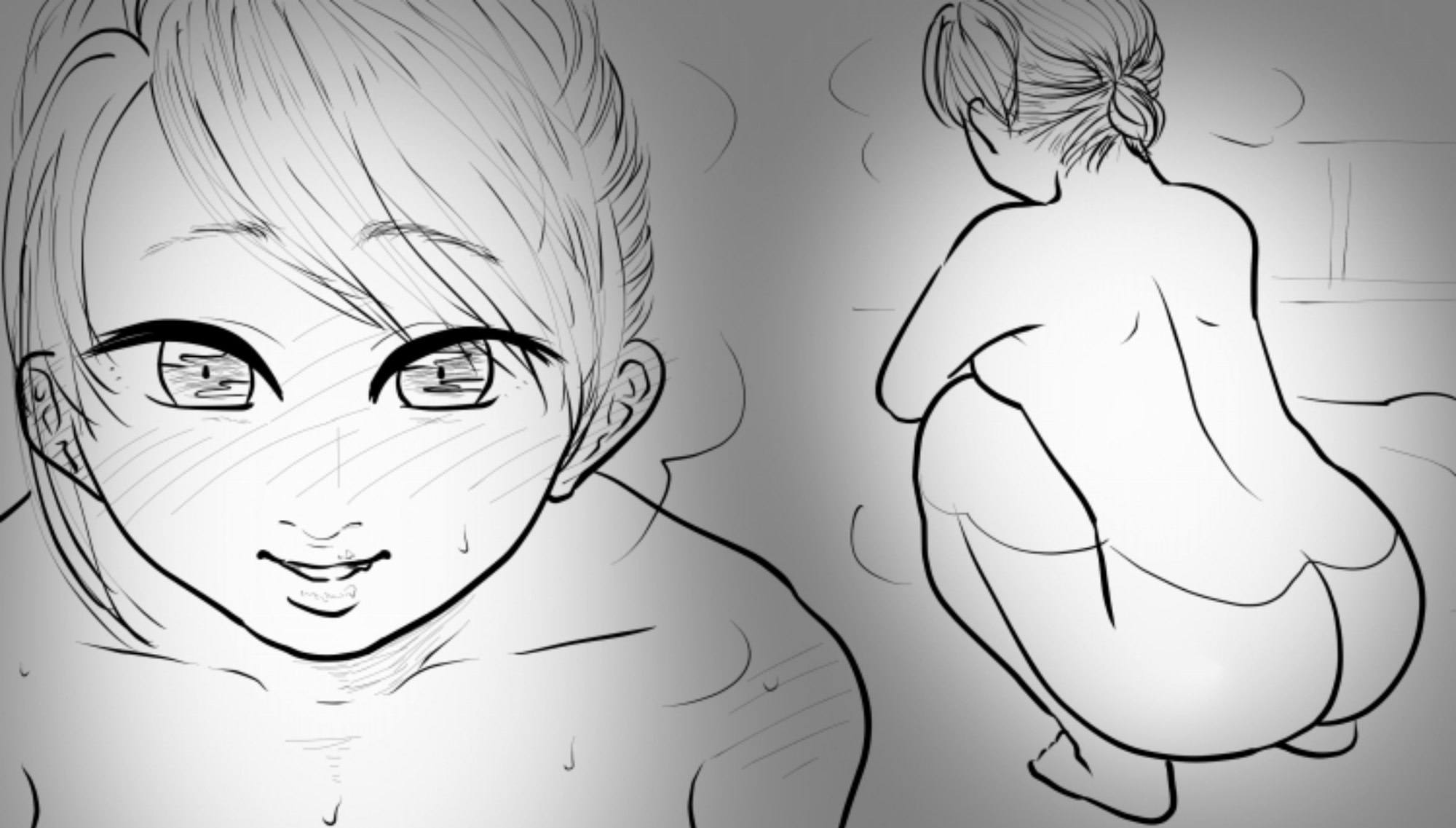
「らめえ！」

ぴしゃり、と言っつて、ぱくり、と亀頭を咥えた。

そのまま、みさちゃんは俺の陰茎を飲み込んでゆく。熱くてどろどろのサヤに収められてゆく、俺のカタナ。

「はああ…、み、みさちゃん…。だめだよ…ああっ」

みさちゃんのサヤは、柔らかくあったかい。まるで俺の刀のためにあつらえたみたい、すっぽりと包み込まれる。



熱とヌルヌル。

鼻息がこそばゆい。

おもむろに前後に動き始める。

まるで、丁寧に丁寧に刀を研いでゆくような、愛情のこもった仕事だ。

水気をたっぷりと含ませて、刀を滑らかに研いでゆく。

柔らかくもいやらしい。

淫らにも愛らしい。

そのあまりにも献身的な奉仕に、比喻でなくカタカタと膝が震えた。

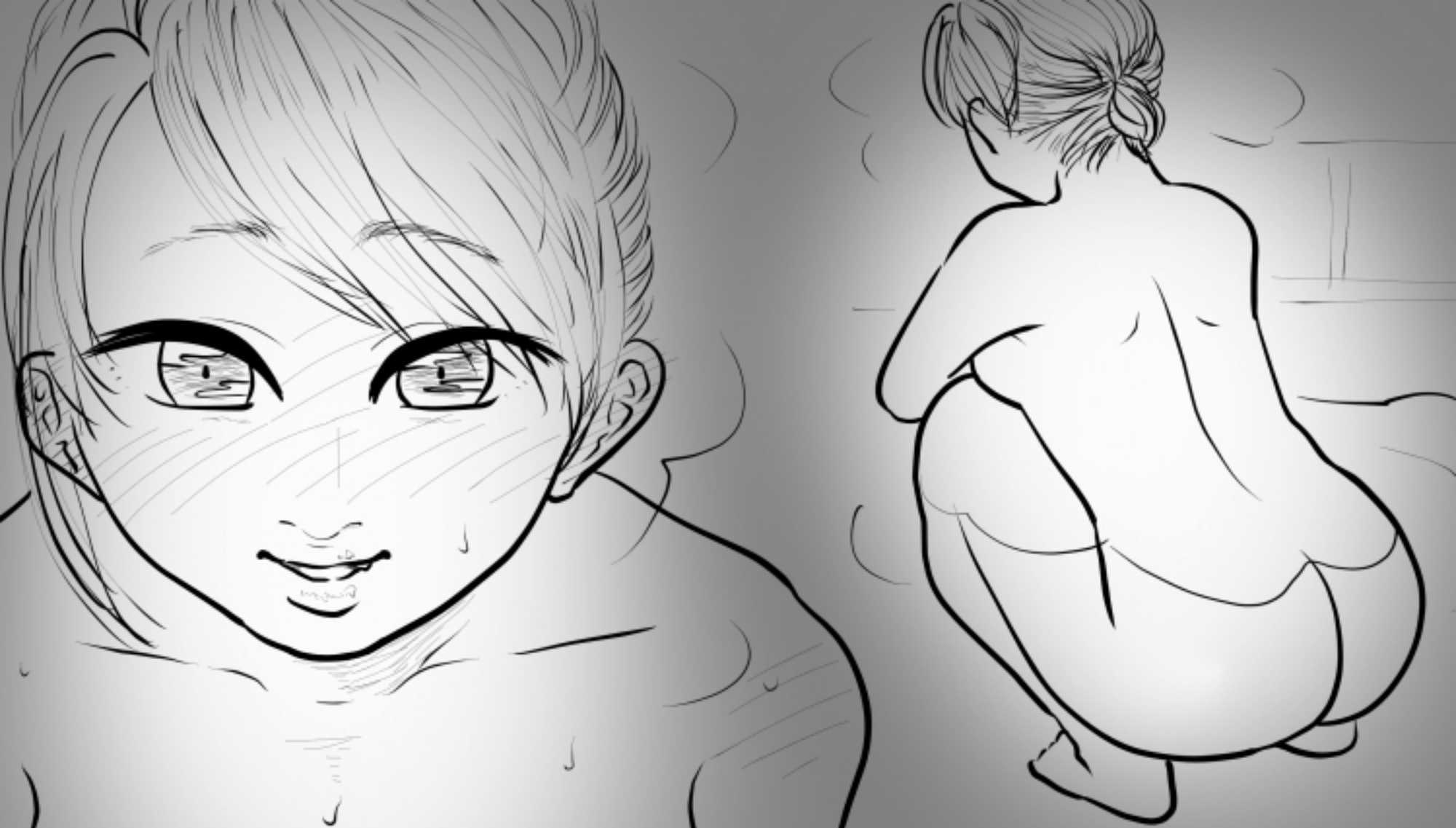
「みさちゃん…、すごい…。たまらないよ」

飽くことなく、何度も何度も往復して研いでゆく…。何度も往復するので、刀がぬらぬらと光沢を帯びはじめた。

自分の仕事の成果を…ぴかぴか光る刀を眺めて確認しては、にんまりと喜び、また研いでゆく、みさちゃん。

その間、俺は耐えに耐えていた。

ここで出すわけにはいかないのだ…！



武士の一分で、ある意味地獄のような天上の奉仕を、ケツの穴を締め、締め、締め、タイヤでも噛み切れそうなほど歯を食いしばって耐えた。

「ふはっ」

みさちゃんが口を離した、その一瞬の間を突いて、湯船の中に座り込む俺。

「ああー！！むうー」

みさちゃんが抗議の声を挙げるが、俺のチンコはもう、湯船の中だ。

「ちよつと…寒くなっちゃって」

言い訳も考えておいた。

「あ…、ごめんなさい。気づかなくて…」

素直なみさちゃんが、素直に謝る。

これ以上何かされたら暴発してしまうので、風呂を上がることにした。

08

「まだ勃ってるよ？ビンビンだよお？」